

第2節 成績観・学力観

【「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.1%)、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(56.4%)という回答が比較的多かった。特に、学力の手段的な側面を重視する傾向が強い。前回と比べて、ほどほどに楽しむ傾向がいくらか強まったようである。】(図2-4、図2-5)

Q14

あなたは、次のように思うことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

中学生の大半は、少なくとも「中以上」の成績をとりたいという希望をもっていた。これは、いわば成績観の量的な側面である。それでは、質的側面についてはどのような特徴を帯びているのか。次に、中学生の成績観・学力観を概観してみる。

6つの選択肢について、多い順に並べてみる。

- ① [ふつうの生活志向] = 「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.1%)
- ② [名門志向] = 「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(56.4%)
- ③ [高校・大学・短大入学志向] = 「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」(37.7%)
- ④ [学校生活エンジョイ志向] = 「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(33.7%)
- ⑤ [勉強本位志向] = 「今は勉強することが一

番大切なことだ」(29.7%)

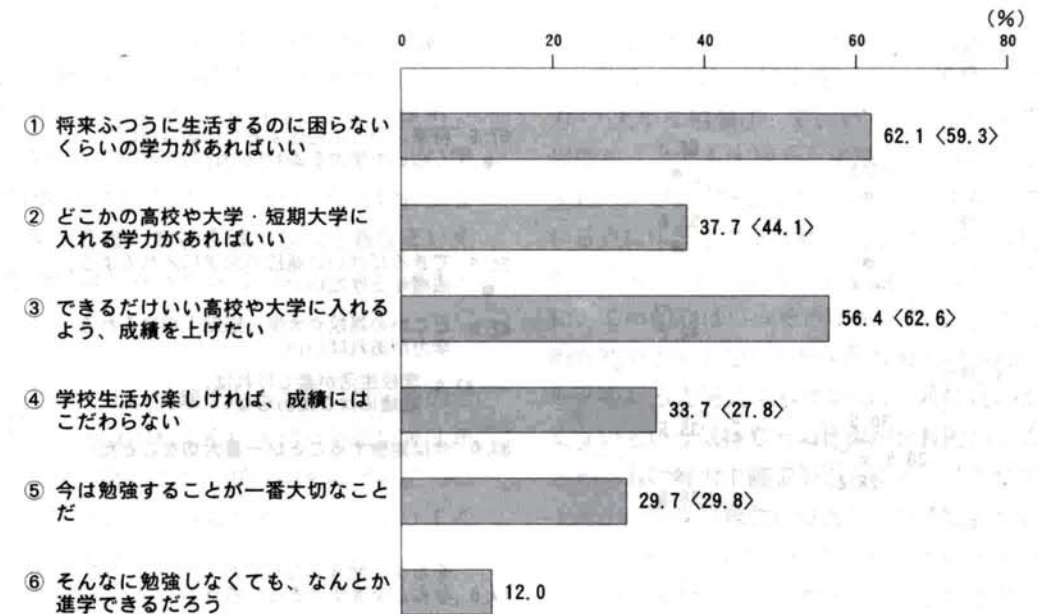
⑥ [進学楽観志向] = 「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」(12.0%)

もっとも多いのは[ふつうの生活志向]で、生活するのに困らない程度の学力があればよいと考える者が6割を超えた。とはいえ、[名門志向]も強く、できるだけいい高校・大学に進むために成績を上げようという意識が強い。どこでもいいから進学できればいいというのではなく、少しでもいい大学へという希望がみられる。また、学校生活をエンジョイし成績には無頓着であるという者も比較的小数であり、「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」という楽観論も少ない。かといって、「今は勉強することが一番大切なことだ」という意識をもっているわけではない(約3割)。全般的に、中学生は進学に対しては楽観をしておらず、一定の努力の必要性は認識している。とはいえ、それは学力が将来の生活に役立つからではなく、「できるだけいい進学」をするための手段として位置づけられている。

前回と比べて、[学校生活エンジョイ志向]がいくらか強まり、[名門志向]が減っている。大幅な変化ではないが、ほどほどに楽しもうという意識が中学生にも少しずつ広がってきたのかもしれない。

成績の自己評価別には、成績上位者ほど[名門志向]が強く、成績下位者ほど[ふつうの生活志向][高校・大学・短大入学志向][学校生活エンジョイ志向]が比較的に強いという傾向がある。

図2-4 成績観・学力観

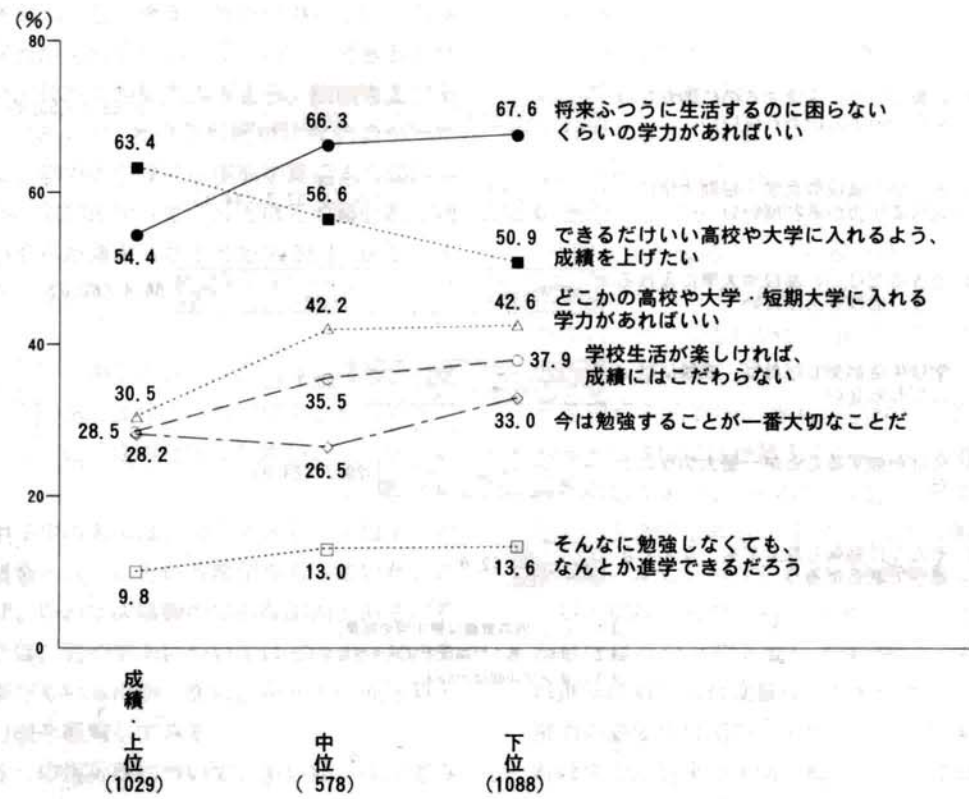


注1) < > 内の数値は第1回の結果。

注2) ⑥は、第1回調査では該当項目なし。

注3) サンプル数は2755人。

図 2-5 成績別に見た成績観・学力観



注) () 内はサンプル数。